

2013年12月15日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 15章 25～32節

説教：なだめる神

あらすじ

イエスは、ふたりの息子をもつある父親のたとえ話を語ります。弟息子の方は、あるとき父親に財産を分けてくれと要求します。弟は大金を手にするやうにすぐに家を飛び出し、遠くの町に出かけ放蕩の限りを尽くします。やがて無一文になり、とうとう豚の世話をする身分に落ちぶれ、食べるものにも事欠くようになりました。あまりのひもじさに耐えかねて弟は父親の所に戻る決心をします。でも父が自分を喜んで迎えるとは到底思えません。それでもなんとか父に対する言い訳を考え、とぼとぼと家に向かうことにしました。その家が遠くに見えたとき、家から走り出す者がいます。よく見ると父親です。父は落ちぶれてしまった息子を抱きかかえ、無事に帰ってきたことを喜び、大宴会を開きます。父の愛に触れた弟息子は心から自分のしてきたことを悔いて告白した。それが前回までのあらすじでした。

1 怒る兄

今日はたとえ話の後半になります。兄は畑から帰ってくると、家の方からなにやら楽しげな音楽やら笑い声がしてくることに気がつきます。いったい何事なのかとそばにいた召使いに尋ねると、召使いは、何年か前に家を飛び出し、それ以来消息不明になっていた弟が無事に帰ってきたこと、そのことを喜ぶためにお父様が宴会を開いているのだと告げます。

弟が家を飛び出したとき、親がどれだけ悲

しみ、落胆したか、兄は一部始終をずっとそばで見っていました。その弟がぬけぬけと父の所に戻ってきただけでも腹が立つ。もっと腹が立つのは、弟のために父が盛大な宴会を開いたことです。父が何を考えているのか、まったく理解できません。

兄にも言い分があるのです。29, 30節。「ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません。それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。」

ふたりの兄弟の性格は対照的です。弟は努力ということが嫌いで、父親の言うことなど聞く耳は一切ない。とにかく今自分が楽しければそれでよい、そんな性格だったようです。いっぽう兄の方は、まじめで、努力すれば幸せになれると信じているタイプです。「長年の間、わたしはお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もない」と言い切れる自信が兄にはあります。がんばって今日まで父のもとで働いてきたのです。そのことを思い出せば思い出すほど、弟のいい加減さが我慢なりません。父親は弟のことを赦したかもしれないが、自分は絶対に赦せない。そんな思いが兄の怒りにますます火をつけます。

このたとえ話を聞きながら、自分の身近な兄弟関係、姉妹関係を思い起こす方も多いでしょう。私の兄は小さな時から家を継ぐ長男として育てられ、弟の私は、この家から出て

自分で努力して生活しろと言われて育ちました。父の愛情は兄にばかり偏り、自分はないがしろにされていたのではないか。そんなゆがんだ感情がひそんでいる自分がいます。

皆さんはどうでしょうか。たとえば親の介護という問題があります。親の世話を私にだけ押しつけ、ほかの兄弟は何もしようとしない。こちらががんばればがんばるほど、そんな怒りが湧きます。そこへ遺産相続のような金銭的な問題が絡んできて、兄弟同士で憎み合うことが珍しくありません。

今朝皆さんと一緒に告白した主の祈りの中に「私たちの負い目をお赦し下さい。私たちも、私たちの負い目のある人たちを赦しました」とあります。けれどもどうですか。本当に、私たちは負い目のある人たちを心から赦したのでしょうか。口で告白しておきながら、実際はそうではない。赦していない。それが私たちの現実ではないですか。ここに出て来る弟は私たちそのものであり、同時に兄もまた私たちそのものです。

2 父と兄息子

1) 父に従っていると言いながら逆らう兄

父親は兄息子が怒って家に入ろうとしないのを見て、兄にこう言います31節。「子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。」

父は兄息子に、「あなたはいつも私といっしょにいてくれた」と言います。父も、兄の努力を認めているのです。そして、「私のものは、全部おまえのものである」とも語り、父の財産は全部兄に譲るつもりであることを明らかにします。

父親は放蕩の限りを尽くし、無一文になって帰ってきた弟に走り寄り喜んで迎えまし

た。そして今度は、弟を赦そうとせず、父に対して怒りを燃やす兄に対しても、この父親は走り寄り、家の中に入るようになだめます。この父親は神を象徴していると考えられます。人間の親ならば、偏った愛で子どもを愛してしまうことがしばしばあります。けれどもこの父親の愛は、だめな弟に対しても、きまじめな兄に対しても、まったく変わらない愛情を注ぎます。

父と兄とのやりとりを見ていくとき、二つ目のことが見えてくるように思います。まず一つ目。兄はこう言っていました。「長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。」自分は父に仕え、戒めを破ったことは一度もないと自信たっぷりです。父もそのことは認めていました。確かに、つい先ほどまではそうだったのかもしれませんが。けれども、今はどうなのですか。もし父に仕えており、戒めを破らないというのなら、たとえ気に入らなくても、兄は父が開く宴会の席に座るべきではないでしょうか。父が弟を赦したというのであれば、兄も弟を赦さなければならない。それが戒めを守るということになるはずですが。

でも兄はそうしません。ということは、どうなりますか。兄は父に仕えていないのです。戒めを破っているのことになります。怒りでいっぱいになった兄はそのことに気がつきません。父は愚かで間違っていて、自分こそが正しい。そう思い込んでいます。

2) 一緒に楽しもうと招く父を拒む兄

二つ目のポイント。兄はこうも言いました。「その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことがありません。」これだけ自分ががんばってきたのに、父は弟ばか

りをひいきして、兄である自分にはなににも贈り物を与えてくれない。強い口調で抗議しています。

これに関連して父親は32節でこう言います。「だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。」

この「当然ではないか」とあるところは、「必ずそうしなければならない」とも訳すことができる箇所です。

兄は、普段一生懸命父に仕えたそのごほうびとして、なにかをもらえるはずだと期待していました。ところが父は兄には何もよこさない。かえって弟のためには子牛をほふり、弟のことを喜ぶためにおまえも宴会に出るべきであると兄は言われてしまいます。これを聞いて、兄はもう我慢ができません。怒りはますます燃えさかります。

3) 父のそばにいたのに父を見失った兄

よく見ると、兄と弟の上に起きていることは実に皮肉です。放蕩の限りを尽くした弟は家を飛び出し、遠い町に行ってしまいました。けれども、結局父の所に戻ろうとしたとき、父に喜んで迎えられるていきます。最も遠くにいた者が、父に見つけ出されたのです。

これに対して、兄はどうでしょう。ずっと父の身近にいました。ところが、弟のことがきっかけで父を憎んでしまいます。その結果父を見失ってしまいます。

3 肥えた子牛がほふられる

どうしてそんなことになったのか。兄は一つのことばにかちんと来ています。どれでしょう。「肥えた子牛」ということばです。

このたとえ話の中で三度繰り返されています。いなくなった弟を喜んで迎えるために肥えた子牛がほふられました。兄はそのことが我慢なりません。これが兄が怒る大きな原因になっています。

このほふられた肥えた子牛は、ある一つのことを象徴しています。罪人である私たちを永遠のいのちの中に招き入れるために、イエスキリストが死んでくださったことと結びついています。父なる神は、神に立ち戻ろうとする罪人を無条件で赦します。でも、そのためにはだれかが罪のさばきを受けて死ななければなりません。だれが死ぬのか。父なる神のひとり子が十字架で死なれました。神は、そこまでして罪人を喜んで迎えるのです。神は、「そうしなければならない」とさえ言われます。

けれども、イスラエルの人々は、父なる神の御心が理解できません。ねたみに燃えて主を十字架に追いやります。主の赦しはどれくらい広がったのでしょうか。今日のたとえ話から言えば、神のそばにいと確信していた人たちが激しく怒るほど、神の赦しは広い。そういうことになります。

兄がその後どうなったのか、たとえ話は何も語らず突然のように終わります。それはまるで、あなたならどうするのか。神が私たちに問いかけているようです。

弟のようにひどいことをしてきた私たちの罪を、父なる神は赦してくださっていました。けれども一方では、あの人この人を赦そうとしていない自分がいます。どうしたら人を赦せるようになるのでしょうか。時々尋ねられます。

おそらく私たちの深いところに、この兄のような自分がいるのだと思います。努力した、

がんばってきた。どうしてもそこを言いたくなるのです。その思いが、神の赦しの恵みを見えなくさせているのかもしれない。

放蕩息子を迎えるために、神はご自分のひとり子を十字架でほふります。兄息子が怒ろうとも、そうしなければならぬと固く決心されます。そのようにして赦された者であったことをもういちど思い起こしていく、そこから始めたいと願います。